

Monotone Vision

知る為への追求は混迷をとまなうことが多い。その捉え方が多面的であり多分にエゴの懐柔があるからだろうか。

例えば、感情面で『知る』ことは始まり(プロローグ)である。それは出会いに過ぎない。相手を『知る』ことは交流を意味する。そうして、幾多の接触、衝突が『理解する』ことを教え、やがて相手の気持ちが『分かる』ようになる。異性間の交流であればこれからさらに相手のことを『考える』ようになり、俄然色めきたってくる。そして、また新たに相手のことを『知る』局面が生まれてくるのである。

一方、理性面において『知る』ことは、究極(エピローグ)であろう。問題との対峙は『考える』ことから始まる。解決の為のプロセスを通して人間の思考は問題を幾つかの部分に『分ける』。個々の断片を分析しやがて『分かる』のである。そして分かったことを統合し『理解する』ようになる。理解……understand、立って下をみること。これはアルピニストが頂上を征服したときの感慨である。自分の辿ってきた道を見下ろし「あ〜、あんな道もあったんだ」、「あそこで迷ったんだ」、反省、感動、理解するのである。

しかし、これでけっして終わりなのではない。『理解する』ことは人間の脳に潤滑油を垂らしたただけだ。提示された問題は脳の片隅にぶら下がっている。これを潤滑油によって円滑に歯車を回転させ、脳の一部に組み入れる、その為『知る』ことが必要なのである。

人は「 $1 + 1 = 2$ 」であることを、『考える』ことをしたり、『理解』したりしない。『知っている』のである。母国語を話す。もちろん、『知っている』から話せる。人間の頭脳は理解した外部からの知識を既知のこととしてその内部に蓄えていく。

故に『知る』ことは究極となるのだ。

ではどうすれば『知る』ことに到達できるのだろうか。その為には理解したあとのインパクト、所謂、事故による衝撃、ある意味、後遺症のようなものを必要とする。その経験という積み重ねによって脳は傷を負うことで知識のシワを増やしていくのである。

『知る』ことは、未知(知らないこと)への憧れ。人間が『未知』を『知』に変える追求には量りしれない努力がともなう。が、いったん得た知識をこうまでなおざりにするのもまた人間だ。それ故、『知る』ことは『知識』と『知覚』の間で微妙に揺れているのである。

しかし、この両者の『知る』こと(すなわち、感情面における知覚と理性面における知識)が、言葉上の問題であるにしろ、区別されるべきであろうか。問題を考えるときの悩みや、理解の喜びは感情面の発露であるし、人との交流において理性としての計算は誰もが働くものなのである。したがって、この両極の有機的なつながりがもっと強調されてしかるべきである。その融和が効果的になされたとき、それは例えば心象風景のように記憶とビジョンの流れの中で人の心に刻まれていく。この心象風景のスナップをもっとたくさん蓄え、ファイルをしていかなければならない。だが現状は、知識が苦痛の感覚の中で、強制的に詰め込まれ、五感を通しての行動は知識の反動として顕れてしまい、その素描は歪められてしまっている。我々は、もっと知覚をカメラのレンズとしてではなく、生きた眼球として扱うべきではないか。そのためにモノの見方ということが重要になってくるのである。

『よい目でみること』。フランス語では‘アヴェック・ボン・ヴー’。どの世界でもよい見方は要求される。退廃によって量産された文化と、よい目で培われた文明を通してその『見方』を感じることができる。

トケイヤーはその著書(『ユダヤ発想の脅威』だったろうか)の中で次のように分析している。

「神は人間に二つの目を与えた。一つの目は他人の長所を温かく見守る目であり、もうひとつは自分の欠点を厳しく見つめるそれである。この二つの目は調和し合っている」

すなわち、人間の両眼はたえずバランスをとりながら、知覚するのである。

顔の表情のなかにもそのことは如実に表れている。人間は、目で表情を語り、ものをいう。顔をよくみ

ると左右の目がアンバランスに配置されていることに気がつく。一般には、左の目は優しさの表情を湛え、右はきつい印象を与える。その両眼の強さの度合いによってメンタルなシンメトリーを保っているのである。これが両眼とも同じものであったらどうであろう。ペルソナや能面を思い浮かべて欲しい。それは一種独特の表情をもっている。表情があまりに一方的過ぎてこちらから返すものがない。不気味ですらある。完璧なまでのシンメトリーは逆に不完全さを協調してしまい、その表情の解釈をみるものに委ねるのである。能面が表情のない顔に例えられる所以である。

優しさの目は、母なる懐の安らぎ(Mama factor)であり、厳しさの目は父なるこぶしの痛さ(Papa Factor)である。精神の安定はそれらが共存して支え合わなくてはならない。家族と同じである。こうした優しさは表情を維持するM. F (Maintenance Factor)であり、厳しさは意志を達成しようとするP. F (Performance Factor)である。これらの両極の機能が一つの殻の中で葛藤し調和を保とうとしている。が、そのバランスがくずれると人の顔は歪み、泣き、ほころび、笑い、感情が表面に突出してくる。その顔の表情の変化の中に、時としてそれらのFactorが垣間見えるのである。

もちろん、これらのFactorは『知る』局面のなかでも機能する。心象風景におけるビジョンは思考を補助する(視覚補助)M. Fであり、その映像のエネルギーの中で『知る』ための理性P. Fが育まれていく。二つのFactorは衝突し、練られ、調和した段階で相乗効果的に記憶に組み込まれるのである。

人間の心は胸にあるのではなくもちろん頭の中にある。脳の後頭部にある神経細胞が視覚を受け持っている。目から伝えられた視覚情報はギャバなる神経と神経の中継点で一定のレベルに達し、ビジョンが選択されるのである。

このことをもう少し掘り下げて分析してみよう。

目の働きを三つに分類してみた。

①記憶(input)

②表情(output)

③判断(integrated circuit)

記憶とは『眼』を意味するものである。その対象となるもののスペクトルは『眼』のレンズを通して直接脳に光を照射する。もちろんすべてを記憶するわけではなく無意識の領域における選択がある。デジャ・ヴ(既視感)という言葉がある。今、見ていることが、以前どこかで見たように感じることである。会話の途中で以前同じことをいったことがあるとか、風景を見ていて前に見たことがあるとか、誰もが一度は経験したことがあるに違いない。これはたぶん過去の断片的な記憶がギャバにおいて脳の選択に迫られ、歪曲された形で漏れ出るのである。このように、『眼』に触れる事物を漠然ととらえ記憶する働きが脳にある。

記憶が吸収なら②の表情は発散である。目の表情をいった言葉は多い。『虚ろな目』、『濁った目』、『冷めた目』、『澄んだ目』……。心の動きに応じて虹彩はひとみの表情を繕っていく。その目の動きが人の装いを看破し、心の奥深くにある感情を吐露させるのである。

最後の③判断の目は意思である。『診る』、『観る』等に代表される。対象となるものを『見分けたり』、『見極めたり』するのである。『目を細め』、『目を怒らせ』、『目が笑い』、いつも判断の目は表情の目を伴い、反応していく。判断の目の本質はその奥に潜む『心眼』なのである。

そうして、これら三つの目はリズムと調和をもって対象物の分析にあたるのである。見ることは『眼』を通して判断し、その結果が『瞳』のなかに表情として現れる。『眼』は生きた『目』となり、記憶として心に組み込まれていく。

『よい目で見ること』はこの流れが正常に働くときであり、そのためにM. FやP. Fを必要としている。『知識』においてはこのプロセスは、考える『困惑の目』、理解する『喜びの目』となり、理解へと近づき、目はその輝きを増していくのである。

さらに、別角度から『知る』ことを考えてみよう。客観性と主観性の立場からである。

土竜感という面白い言葉がある(増原良彦著「あべこべの論理」)。人間の視点は設定される位置によって様々な認識に到達する。

例えば、鳥瞰的な立場。これは高い所から見下ろし眺めたときの視点である。前述したアルピニストの視野はこの立場に基づくものであろう。実はこれは日本人的な発想である。Understand を立って見下ろすと訳したが、実際の意味は“中に入って周りを見ること”である(師弟同行は教育学者フェスタロッチの唱えたものが、戦後の教育改革のなかで日本に受け入れられたものであり、日本では古くから“三步下がって師の影踏まず”の意識の方が普通であった)。この様に、中に入りながら対象と密接な間隔をとって認識に近づく方法を、虫観的な立場という。

どちらも一長一短はある。鳥瞰法は、全体的にみることはできるが細かい点は見落とし経験に欠ける。虫観法は一つの分析には優れるが応用性が劣る。前者は教師的立場であり、後者は生徒的立場である。その認識の違いが、教壇という10cm足らずの高さを壁にしてしまう。生徒が提示された問題を狭い視野で悩み分析するのに対し、教師は当然のこととして幾つもの解答方法を生徒が解けることを期待して提示する。その立場が一方的であるから飛び上がれない生徒にとってはドロップアウトの要因となるのである。少なくとも地上に降りることができる教師側が虫観的な立場で生徒の中に入る必要があるのだ。

さて、こうした、虫的、鳥的な視野に対してさらに地面に潜った見方を増原氏は考える。それが土竜(モグラ)感という立場である。これは例えば星座を見上げるようなものと氏は説明する。本来は銀河系から星座を語らなければならないものを人間は自分に都合のいいように、自分の目で見渡すことができるような位置から星を仰ぎ観るのである。

自分の顔のなかに仮にホクロがあったとして、その位置が自分にとって右の頬にあると認識しても他人が顔を見るときには左の頬と判断してしまう。土竜感は鏡像の世界の視野なのである。実は、この主観的な見方が我々の認識の大半を占めている。ところがこれが心象風景の場では俯瞰的な風景の中に自分をおいていることがしばしばある。心は自然に主客を入れ替え最良の状態を生み出す。この変換の過程が重要なのであり、心象風景をいろいろな観点から見るができるようになったとき、初めて『知る』ことができるのではないだろうか。

学問の本質は経験、体験である。しかし、今の生徒は机と椅子に縛られ、学問の多くは暗記にその主流が移ってしまっている。だから、模倣はできるが着想、発想の貧弱な生徒が増えてくる。どんな視野にも生徒個人がもっているイメージがあり、けっしてそれは破壊されるべきではない。彼らの心象風景はいっしょか他人の風景に侵され、自分で夢見ることができなくなってしまっている。色彩豊かな夢は教育の養分であったはずだ。

安野光雅氏は数学に造詣の深い画家である。氏の描く幼児向けの絵本、文章は何と想像力、生命力に満ち溢れていることだろうか。既知の概念を自分の目で捉え、その風景を絵として表すことの出来る力は技量というより心の豊かさであると思う。そしてこれは幼い頃、誰もが心に蓄えていたものであったが、いつの間にか知識の強制は、ギャバのような知覚神経さえも擦り減らし、色彩パターンを枯渇させていってしまった。

いま、生徒から奪い取った、かつてのビジョンをもう一度復元し、小さな種子を心に植え付けてやるべきではないのだろうか。

未来に咲く花はけっしてモノトーンではないはずである。

※数学と教育学のスタンスの違いについてインターネット上で仮想会議が開設されたことがあります。その方向性のひとつの提示として、「ポアロの挑戦」なる掌小説を執筆しました(数学のいずみに掲載されています)。そのあとがきに書いたのが「ポアロの挑戦に至るひとつの考察」という本文ですが、こちらの方は未掲載のままです。それから10年以上も経った未来である今、生徒の心象風景は、期待とは違い、ずいぶんモノトーンになってしまったような気がしています。

何が悪かったのでしょうか？